

犯人特定のロジック

※以下、ネタバレを含みますので、必ずゲーム終了後にお読みください。

母親ユメは屋敷で一人暮らしだった。これを踏まえて、屋敷を捜索して得られた証拠を検証すると、おのずと、昨晩に屋敷を訪れた犯人が浮かび上がってくる。

①書斎の床に散らばったタバコの灰

渓五は一週間前に屋敷を訪れ、ユメが医者に止められてタバコを吸っていないことを聞き、灰皿に灰が入っていないことも確認している。昨晩、屋敷を訪れた一海も、きれいな灰皿を目撃している。

現場に灰が残っていたということは、一海が来た後で、誰かがタバコを吸ったということになる。

タバコを吸う**晴二、蓮三、四葉、渓五**が、犯人の条件として当てはまる。

②トイレの便座が上がっていた

ユメの遺体発見直後に四葉は気分が悪くなり、晴二に連れられてトイレへ行っている。

その際「トイレに入るなり、上がったままの便座に手をついて～」という描写がある。

「便座が上がっていた」これはつまり、以前に男性が訪れてトイレを使っていた証拠である。

男性の**晴二、蓮三、渓五**が犯人の条件として当てはまる

③書斎のゴミ箱に黒い毛髪

書斎の捜索で、ユメの頭が白髪に覆われていると分かるので、黒い毛髪はユメのものではない。

ユメの手を調べると、握っていた何かを取るために、こじ開けられた形跡がある。

これは、犯人の髪の毛をユメが死ぬ間際に掴んでいたと推測できる。

犯人は抜けた自分の毛をユメの手から奪って、ゴミ箱へと捨てたのだ。

渓五は金髪なので、黒い毛髪の犯人の条件に当てはまらない。

④書斎の来客用テーブルに残った、口のつけられないコーヒー

ユメは屋敷に来た人物に「コーヒー入れようか？」と聞く癖がある。これは一海と渓五は身に覚えがある。昨晩屋敷を訪れた一海は、コーヒーを断っている。

つまり一海が去ったあと、やってきた犯のためにユメはコーヒーを入れたが、結果的に犯人は飲まなかつたということになる。

コーヒーアレルギーのある晴二に対して、母親であるユメがコーヒーをいれるわけがない。

アレルギーがあることは一海も知っている。

コーヒーを飲めない**晴二**は、犯人の条件に当てはまらない。

以上の犯人の条件を踏まえると、残る**蓮三**が犯人となる。

補足：書斎の割れた窓ガラス

ユメの遺体の上にまで破片があるということは、殺害後に窓ガラスが割られたことになる。

「響邸へ向かう車の会話」で蓮三がカメラが壊れたことを話していて、「響邸での行動」の際に、電話で「カメラのレンズが壊れて……」と話している。

ユメ殺害時に、お守り代わりに首から下げていたカメラをぶつけてレンズを割ってしまい、毛の長い絨毯にその破片が落ちたため、誤魔化すために窓ガラスを割ったのだ。